

ヒューマンアカデミー日本語学校東京校

自己点検・評価報告書

(2026年1月実施)

ヒューマンアカデミー日本語学校東京校

校長 宮川 隆史

自己点検・評価項目

《実施時期および方法、実施の体制》

実施時期：毎年1月末 年1回実施

実施方法：アンケート調査・聞き取り調査

実施責任者：校長

実施担当者：自己点検・評価委員会（体制は以下の通りである）

実施結果：毎年2月にホームページにて公開する。

課題・問題が生じた場合、自己点検・評価委員会を開催し、検討討議の上、解決する。

[点検・評価]

●教育水準の向上を図り、日本語教育機関の目的を達成するため、次に定めるところにより、活動の状況について自ら点検及び評価を行う。

- 1) 点検及び評価を行う者：本校においては、拠点長が作成した報告書は、校長に提出され監査・保管するとともに、ホームページ上で公開する。
- 2) 点検及び評価を行う時期：毎年1回、1月末に行うものとする。
- 3) 点検及び評価を行う際の資料：点検及び評価は、以下の「点検及び評価項目」に基づいて行うこととする。
- 4) 点検及び評価の結果に対する対応：報告書で不適格あるいは不十分であると指摘された項目については、できるだけ速やかに対応策を策定し、実施するものとする。
- 5) 評価は3段階評価とする。
 - A：達成している
 - B：一部未達成であるが、1年を目途に達成する
 - C：達成していない

自己点検・評価報告書は、日本語教育振興協会の「日本語教育機関のための自己点検・評価項目」を参照し、学内に設けた自己点検・評価委員会で検討し、以下の通り自己点検・評価報告書を作成した。ヒューマンアカデミー日本語学校大阪校内に、自己点検・評価報告書を作成するにあたり委員会を設け、自己点検・評価を適切に行う。委員会メンバーは以下に記載する。

ヒューマンアカデミー日本語学校東京校 自己点検・評価委員会
令和7年12月現在

委員長	校長	宮川 隆史
副委員長	事務局長	小林 昌樹
委員	学務責任者	菊池 章吾
委員	教務主任	小松 知博
委員	学生募集責任者	日向野 幹也
委員	教育顧問	辻 和子

委員	教室	安井 亮太
----	----	-------

日本語教育機関の基本理念、目的及び目標

1. 趣旨

今後人口減少の一途を辿る日本の国力維持と更なる成長に資することを大命題とし、日本の経済・社会を共に支える外国人材を育成する。世界平和につながる人材を育てることにより、豊かな「共生社会」の構築を目指す。

学習者の持つニーズに応えつつ、日本人と外国人がともに生きていく「共生社会」の創生に向け、学習者が社会の一員としての意識をもち、他者とともによりよい社会を築こうとする力とコミュニケーション力を、日本語教育を通して育成する。

日本語教育にあたっては、学習者を社会的存在として捉え、学習者の持つ複言語・複文化を尊重し、その多様性を生かし、言語を使って社会で活動する力を育てる。

さらに「世界をつなぎ、世界を創る」地球市民としての意識を持ち、世界の国々の人々が安心、安全に生きることができる「共生社会」の創生に資する人材の育成を目指す。

2. 教育理念、目的及び目標

- (1) 学習者を社会的存在として捉え、社会で活躍する人材を育てる
- (2) 新しい「共生社会」を創成し、国際社会をリードする人材を育てる。
- (3) 学習者が自立的・自律的・主体的に学ぶ力、学び続ける力を育てる。
- (4) 学習者の「できる」力を育てることを目標とし、目標は Cando で示す。
- (5) 学習者が一人ひとり複言語・複文化を持つことを前提に、
学習者の多様性を認め、理解し、個々の学習を支援する。
- (6) 授業は行動中心アプローチの考え方により進め、学習者の5つの言語能力を育成する。
- (7) 学習成果は「できる」ことで評価し、CEFR/日本語教育の参照枠の言語能力レベルで示す。
卒業時の日本語力の到達目標は B2 レベルとする。
- (8) 社会人として必要な発想力、思考力、創造力、問題発見・解決力を育てる。
- (9) 日本文化やマナーを理解し日本語の特色である「他者を尊重するコミュニケーション力」を育てる。
- (10) 他者とともに生きることを意識させ、地域・社会とつながる力を育てる。
- (11) 学習者の求める進路目標の実現を支援する。

●点検及び評価項目

〈評価項目〉	〈評価〉
1. 教育の理念・目標と、その具体化のための方策	
(1) 上記「理念」と「目標」とがお互いにどのように関連しあっているかを説明できる	A
【振り返り】	
<ul style="list-style-type: none"> ・「世界をつなぎ、世界を創る」のスローガンのもと、学習者の力と心の育成につながるカリキュラムを提供。言語力の構築だけでなく、「他者を尊重したコミュニケーション能力」の習得を目指す。 ・採用時研修で確認。VOD でも確認可能。 	
2. 日本語教育機関の運営	

(1) 認定日本語教育機関認定基準又は日本語教育機関の告示基準に適合していることを年1回以上確認している。	B
(2) 運営の透明性が確保されている。	A
(3) 運営に必要な情報が機関内の関係者間で共有されている。	A
(4) 運営にあたり法令を遵守している。	A
【振り返り】 現行にて運営における透明性は確保しているが、シラバスの制定により更なる透明性と目標と行動の共有を目指していく。	
3. 情報公開	
(1) 機関の設置者、教育内容、定員、進路等の情報をホームページ等で公開している。	A
(2) 募集及び納付金に関する情報を公開している。	A
(3) 入学希望者やその関係者に理解できる言語で情報提供を行っている。	A
(4) 情報は十分に整理されて公開されており、必要な情報がどこにあるかが分かりやすく示されている。	A
(5) 公開されている情報は常に最新のものに更新されている。	A
【振り返り】 HPをはじめ、情報開示に関しては適宜更新を行い、最新の情報提供を実施できている。	
4. 入学者の募集と選考	
(1) 適切な方法で入学者の募集を行っている。	A
(2) 適切な方法で入学者の選考が行われている。	A
【振り返り】 正確な情報提供と海外代理人との関係性が重要であるため、現地出張なども含めた上で、教育目標と出願者の目標との合致の精度を引き続き高めていく。	
5. 教育活動	
(1) 教育目標に合致した教育活動の計画を作成している。	A
(2) 教育活動を適切に実施するための手立てを講じている。	A
(3) 授業を含む教育活動全体の検証を定期的かつ適切に行っている。	A
【振り返り】 教育活動の課題として、学習内容や学習予定、評価基準を明確に開示するために、シラバスの策定が重要であり、活動の適正性や検証の精度を高めていく。	
6. 教職員育成	
(1) 教育力及び支援力強化のための取組を適切に行っている。	A
(2) 教職員の自己評価等を含む多方向的な教職員評価を行っている。	A
【振り返り】 教職員の多方向的な職員評価については、常勤職員の業務評価制度をもとに、策定中の非常勤講師の評価制度を明確にし運用を進めていく。	

7. 学生支援	
(1) 日本社会を理解し、一構成員として活動するための取組を適切に行っている。	A
(2) 進路指導を適切に行っている。	A
(3) 安全な留学生活を送るための適切な取組をしている。	A
(4) 入国・在留に関する指導及び支援を適切に行っている。	A
【振り返り】 学習者が日本での生活に適應できるよう、入学前オリエンテーションや生活相談アワーといった生活支援をはじめ、アルバイト説明会や不動産会社の説明会などを開催し、学習者への継続的なサポートを行っている。	
8. 施設・設備	
(1) 語学学習に適した施設・設備である。	A
(2) 学生及び教職員の安全を考慮し、適切な対応を行っている。	A
【振り返り】 法令遵守のもと、学習者や講師が安全に施設を利用できるよう災害時の訓練をはじめ、安全を考慮し適切な対応を行っている。校舎全体の劣化や老朽化に対するメンテナンスを計画的に行っていくことが必要であるため、継続的な確認を進めていく。	
9. 地域貢献・社会貢献	
(1) 地域貢献、社会貢献となる活動を行っている。	A
【振り返り】 ボランティアサークルを結成し、定期的に活動に参加・近隣地域と交流し、校舎外での活動機会を創出することで実践的な日本語の習得などにつなげていく。また、学生実行委員会を設け、校内外でのイベント企画を立案・実行し学習者にとって地域社会とのつながりを感じられる環境を提供する。近隣の教育機関との連携・交流においては課題を残しており、今後発展させていく必要がある。	
10. 財務	
(1) 日本語教育を継続的に行うために適切な財務状況である。	A
【振り返り】 上場企業として監査法人による監査を受けた「有価証券報告書」や「決算短信」が公開されており、社会的信用と財務基盤を明示することが可能です。安定した収入源と支出面の適切な管理により、予算編成によって定められた収支管理を行い、日本語学校として継続的な運用が可能な財務状況である。	

【総括】 日本語学校として、安定した経営が実現可能であり、学習者にとって適切な学習環境を提供する体制が構築できていると判断している。	
--	--